

口演 26 汚れの見える化によるエコバッグ洗浄頻度向上への取り組み

氏名（所属）

○鶴飼典佳（ウイ リン） 松本有未 手嶋優太 松野萌 山科秀一郎 佐藤千歳
日名地洋介 森田典義 土屋啓三 加藤直之 片岡博喜（岡崎市保健所）

要旨

エコバッグの利用普及に伴い、その洗浄頻度の低さが食中毒菌汚染リスクとして指摘されている。そこで、消費者のエコバッグ洗浄行動の改善を促すことを目的とし、エコバッグの汚染を ATP 拭き取り検査により可視化し、それに基づく啓発活動を実施した。

【目的】

近年、日常の買い物行動においてエコバッグの利用が広く普及しているが、消費者のエコバッグ洗浄頻度が低い現状が指摘されている。エコバッグを定期的に洗浄せず継続的に使用することは、汚れの蓄積により食中毒発生のリスクを高めることが懸念される。本研究では、このリスク低減を目的とし、エコバッグの汚染を可視化する手法（ATP 拭き取り検査）により、データに基づく効果的な啓発活動を実施することで衛生意識の変容を促し、消費者のエコバッグ洗浄頻度の向上を目指す。

【方法】

汚れの見える化の手法に ATP 検査を用いることとしたが、エコバッグにおける報告例がないため、初めに、エコバッグの使用状況と ATP 値の相関の確認及びエコバッグの汚れの基準値の設定を行った。前者は、市内スーパーで消費者を対象に、エコバッグの ATP 検査と、エコバッグの使用頻度と洗浄頻度についてアンケートを行った。エコバッグの ATP 値と使用頻度／洗浄頻度について相関の確認をした（n=19）。後者は、洗浄後のエコバッグについて ATP 検査を行い、得られた数値を 3 倍（任意）して基準値を設定した（n=11）。

次に、エコバッグの洗浄についての啓発活動を行った。現在の洗浄頻度についてアンケートを行った後、ATP 検査を行い、基準値を超えた場合に数値を見た感想及び今後の洗浄頻度予定について追加アンケートを行った（n=59）。アンケートの質問のうち洗浄頻度については、現在の洗浄頻度よりも今後の洗浄頻度が上回った場合を増加、同じだった場合を維持、下回った場合を減少と判定した。

【結果】

エコバッグの使用状況と ATP 値の相関については、エコバッグの洗浄頻度が低いほど、ATP 値が高い傾向にあった（ $R^2=0.78$ ）。洗浄後のエコバッグの ATP 値は約 1,500RLU だったため、これを 3 倍し、基準値を 4,500RLU に設定した。エコバッグの啓発活動におけるアンケートのうち、消費者が数値を見た感想は「キレイだと思っていたが汚かった」が 54.2%と最も高かった。洗浄頻度は、増加が 81.4%と最も高かった。

【考察】

ATP 拭き取り検査による「汚れの見える化」は、対象者の 54.2%が「キレイだと思っていたが汚かった」と回答したように、消費者の主観的な清潔認識と客観的な汚染実態との乖離を顕在化させた。この客観的な汚染度の認知は、81.4%の消費者がエコバッグの洗浄頻度を増加させると回答する具体的な行動変容を促すことを示唆した。

【結論】

今回実施した啓発手法は、エコバッグによる食中毒リスク低減に有効と考える。